

準拠集団と道徳性の発達

(第2報告)

- (その1) 道徳性テスト作成の試み
- (その2) 準拠人選択反応と道徳判断反応の全般的特徴
- (その3) 自己と準拠人の道徳判断反応の一致・不一致の効果
- (その4) 親と子の道徳判断反応の比較
- (その5) 子どもの道徳判断反応と、自己のみた友人および母親の道徳判断反応との関係の分析

古 畑 和 孝
向 井 敦 子
明 田 芳 久

問題：先に第1報告（古畑・向井，1975）においても述べたように，筆者らは道徳性発達の心理学的基礎に関する研究（主任研究者・沢田慶輔東京大学名誉教授）のうち，主として準拠人・準拠集団との関連から，その課題に取り組む部分を担当し，一連の研究を行ってきた。筆者らの得てきた成果は，その重大な課題に応えるには，未だ余りにも不十分である。しかしながら今後の研究への基礎資料として，そのデータの中から，次の5点を選択し，以下にその概要を順次略述することとする。

まず（その1）として，道徳性テスト作成の試みについて述べる。これは筆者らが道徳性発達に関する指標を得る試みの中で，既成のテスト類のうちには本研究の目的との関連では適切なものを見出すことができず，そこでその指標を得るためのテストを試作したものである。（古畑・深見・発智，1972）

本稿を，本研究の協力者であり，また共同研究者としても参加された，熱情的教育者，埼玉県入間市教育委員会教育次長の現職としてご活躍中急逝された故・発智弘雄氏の霊に捧げる。

つぎに、(その2)では、第1報告で述べた子どもの準拠人を把えるひとつの枠組に対する子どもの反応と、試作した道徳性テストに基づく子どもの道徳判断反応のそれぞれの全般的特徴ならびにその関連性について検討を試みる。(古畑・向井・明田・発智, 1974)

ところで、子どもの道徳判断反応は、その準拠人の道徳判断反応と、はたしてどの程度に一致し、またくいちがっているものであろうか。それが一致している場合と、不一致の場合とでは、それが子どもに明らかにされるならば、子どものそれ以降の道徳判断反応に一定の異なった効果をもつことが期待される。(その3)では、この点に関する実験的研究について言及する。(明田・古畑・向井, 1974)

さらに、対人的葛藤状況を含む道徳判断の状況で、親と子どもとは、現実にもどのような判断をしているのか。また、子どもは親を、親は子どもを、どのような判断をすると知覚しているのか。その判断の分布ならびにその判断の一致度を4つの観点から比較したものが(その4)である。(古畑・向井・発智, 1975)

最後に、準拠人としての友人ならびに母親の道徳判断反応を、子ども自身はどのように推測するか。またその理由は何か。その点の分析、検討の結果を(その5)に略述する。(向井・古畑・発智, 1975)

なお、紙幅の関係などで、今回は割愛したいいくつかのデータについては、機を得て、改めて報告することとしたい。

(その1) 道徳性テスト作成の試み

目的：道徳性発達の心理的基礎に関する研究の一環として、子どもの道徳性発達についての指標を得るためのテストを試作し、その基礎資料を提示すること。

方法：(1)対象：小学校上級より中学校にいたる公立学校の男女児童・生徒、本テスト試作の際の被験者は、埼玉県入間市の小学校4年より中学校3年にいたる各学年約300名ずつ、合計約1,800名。

(2) テストの形式：質問紙の形式による。従来よりの関連諸研究を参照し、子どもの具体的生活場面で遭遇する可能性の多い、主として対人的葛藤状況での、道徳的心情判断行為などを含む問題を設定して、これを簡単な記述で示し、そのそれぞれに対する子どもの反応を、予め用意した、後述する4選択肢の中から、最適のひとつを選ばせるかたちで求める。多肢選択の方式としたのは、古畑（1967）が、以前に共同研究者と考案した自由記述式のものと対比の意味もあった。

(3) テスト場面：具体的には、規則・約束の遵守、規則違反への対処、誘惑に対する抵抗、反道徳的衝動の制御、他者への配慮、正義感、責任感などに関し、子どもが現実遭遇する可能性のある場面を多数選出し、それに関する簡単な記述を作成した。これを道徳性の問題の研究者、小・中学校教師に委嘱してその検討に基づき、また学校での施行所要時間を顧慮して、結局16の場面にしぼった。そして、さらに被験者の一義的理解を得やすいように用語・表現の改訂をはかった。

(4) 選択肢の基準：Hoffman(1970), Kohlberg (1963, 1964, 1969), Peck & Havighurst (1960), Piaget (1932), 沢田慶輔・神保信一 (1966), その他を参照し、結局4段階の類型的基準を設定し、その基準に基づき、各問ごとに、そのそれぞれに対応する4選択肢を作成した。その基準は次の通りである。

A：自分中心で、自己の欲求充足や満足追究を主に考え、自分の気の向くままに、相対的には衝動的に行動し、他者の福祉や反応を余り顧慮せず、考えるとしても自分の個人的目的達成に役立つかぎりにおいてであり、したがって道徳的に行動するのも不道徳的に行動するのも、自らの利益との関係においてであるような類型。

B：親や教師やその他権威のある成人にどう見られるか、あるいは自分の同輩・仲間にもどのように思われるかということに基づいて、人の不承認を受けることは避け、同調するようなかたちで道徳的に行動したり、その必要がないと思えば不道徳的に行動することがあるような類型。

C：正邪・善悪についての自分自身の内面的基準をもち、それにしたがって判断し行動する。遵守すべき規則・原理・規範などを強く意識して、道徳的原理にしたがって行動しようとし、それができなければ罪悪感を感じ、融通性や柔軟性には欠けることもあるような類型。

D：強い道徳的原理を確立し、それにしたがって判断をし、行動するが、その行為の結果については客観的な評価をし、自分のみならず他の人の福祉にも関心を抱き、他の人に役立つ場合には自己犠牲をも辞さない。合理的・現実的に評価し、規範・規則の適用も柔軟性をもって行うような類型。

(5) 設問の形式：直接2人称で問うことは避け、被験者と同姓同年齢のAさんならどうすると思うかを問う、やや間接的・投影的な設問とした。また4選択肢中、最適のものを見出しえぬ場合には、次善のものを選択の上、Aの最もとりそうな行動についての自由記述を求めることとした。

(6) ゲス・フー・テスト：被験者自身の4肢選択の判断反応とともに、他者による判断を得るために、前述の4類型A・B・C・Dのそれぞれに対応するゲス・フー・テスト形式の設問をも作成し、各学級内で、そのそれぞれに適合すると思う者を3名以内記入させることをも併せ行った。

(7) 各問毎の選択肢の適切さの吟味：各問毎に、前記基準に対応するような4選択肢を構成したのであったが、その選択肢の基準との関連での適切さを吟味するために、道徳性研究者（沢田教授を中心とする研究会に参加の大学教師、小・中学校教師）および教育心理学専攻ICU大学院学生に委嘱し、各選択肢がA・B・C・Dのいずれにあたると思うかについての判断を求めた。その有効回答数は27。筆者らの前記基準との一致数は表1

表 1—1 4 選択肢と基準の 4 類型との対応についての判断

基準との 一致数 (16問中)	16	15	14	13	12	11～
人数 (%)	15 (55.6)	4 (14.8)	4 (14.8)	1 (3.7)	3 (11.1)	0 (0)

表 1—2 各問別の基準と評定者の判断との不一致数

設問 番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
不 致 数	2	1	0	2	0	0	2	4	4	5	1	0	1	1	1	1

—1の通りである。

また、各問別の基準と評定者の判断との不一致は表1—2の通りである。

以上の結果、筆者らの基準と、27名の評定者の各問毎の4選択肢についての判断との一致率は全体としてかなり高いことが示された。過半数の評定者の判断が、筆者らの想定した基準と完全に一致しており、設問別には、8, 9, 10の3設問に関してのみ数名の判断が筆者らの基準と不一致であるに過ぎなかった。したがって、選択肢はいずれも適切だと判断された。ただし、評定者のコメントなどをも参照し、表現を一部改訂した。

以上の手続きによって試作されたテストの項目は以下に示す通りである。

つぎのページから、いくつかの文章が書いてあります。その中には、あなたと同じ学年で、同じ年れいで、あなたが男なら男どうしの、あなたが女なら女どうしのAさんがでてきます。いろいろな場面で、Aさんならどう思い、どうするかを考えて、イ・ロ・ハ・ニと4つずつ書いてあるものの中から、いちばんぴったりするものをひとつだけえらんで、○でかこんでください。もしもぴったりするものがなくても、4つの中ではAさんの考えにいちばん近いと思うものを、かならずえらんでください。その上でAさんならきっところうすると思うことがあったら、イ・ロ・ハ・ニの下の()の中に書き入れてください。

これはテストではありません。どれが正しいとか、どれがちがっているということはありません。学校の成績ともかんけいありません。

まず、名前などをはっきりと書いてください。

_____ 学校 _____ 年 _____ 組 _____ 番

氏名： _____ (男・女)
 一方を○でかこむこと

注意：ではAさんのことを考えて、いっしょうけんめいやってください。
○をつけるのは、その前に、かならずイ・ロ・ハ・ニを全部よく読んでからにしてください。

1) Aさんは放課後家に帰る途中、バスの中でやっとひとつ席をみつけてすわりました。バスはますますこんでいきます。そこに年とった人が重そうな荷物をもってバスに乗って来ました。でもだれも立って席をゆずるようすもありません。Aさんも体育の授業のあとでつかれているのですわっていたい気がします。

(イ) ほかの人たちも席をゆずるようすもないのだから、自分だけが立たなくてもよいと思う。

(ロ) 学校でも年よりには席をゆずるように言われているから、つかれているけれども立って席をかわる。

(ハ) 自分がかれているのだし、やっとすわれたのだから、そのまま目をつぶっている。

(ニ) 自分もつかれているが、年よりは荷物まで持ってもっとたいへんだろうから、席をかわる。

()

2) Aさんは学校からの帰り道に、道路で何か落ちているものをみつけました。近よってみたら、さいふでした。じつはその日Aさんはあしたの授業のためにえのぐを買わなければなりませんでした。でも運のわるいことに、Aさんの両親はるすで、夜おそくならないと帰ってきません。Aさんは自分のこづかいもありません。だれもみてはいないようです。

(イ) あした使うえのぐが買えるのだし、だれが落としたのかも分からないのだから、そのさいふをもらっておく。

(ロ) 落とし物とはどけ出ないといけないから、えのぐはぜひ買いたいが、けいさつにとどける。

(ハ) さいふを落とした人はどんなにこまっているだろうと思って、すぐ

にけいさつにとどける。

- (ニ) 先生や親や友だちなどにあとでもしみつかったらたいへんだから、けいさつにとどける。

()

3) Aさんは友だちのBさんと放課後いっしょに遊ぶ約束をしました。ところが、そのあとから、別の友だちのCさんが、Aさんのいちばん好きな遊びをグループでいっしょにしようと強くさそいにきました。でもBさんはその遊びにはさそわれていないのです。

- (イ) 約束どおりにAさんと遊ぶか、CさんにBさんも仲間に入れるように話をする。

- (ロ) あとで約束をやぶったことを、親か先生にしかられそうなら約束をまもるが、そうでなければCさんたちと遊ぶ。

- (ハ) Cさんたちと遊ぶのがいちばん楽しいのだから、おもしろい好きなことをやるのがあたり前だ。

- (ニ) 約束はまもらなくてはいけないから、Cさんのさそいはことわって、やはりBさんと遊ぶ。

()

4) こんど学校にけんぴ鏡がはいりました。これで理科の実験はとてもよくできるようになりました。勝手にいじったり、さわったりしてはいけないと言われていています。しかしAさんも友だちも理科部員だし、さわるなといわれると、ますますためしてみたくくなります。

- (イ) 勝手にいじったりしてはいけないといわれているから、さわらない。

- (ロ) 許可なくいじって、もしこわしたら、せっかくの実験もだめになるからさわらない。

- (ハ) 先生や他の人たちにみつからなければ、友だちもみないじりたいのだからためしてみる。

- (ニ) せっかくあるのだし、理科部員なのだから、すこしぐらいならかまわないと、ためしてみる。

()

5) Aさんはよく自分で計画をたててみます。たとえば, “テレビをみるのは1日2時間以下にしよう”とか, “自分のできることは, お母さんの仕事をできるだけ手伝おう”とか, “日記は毎日つけよう”といったふうに。ところがなかなか計画が守れません。そこでいらいらしています。

- (イ) くよくよしないで, 自分のとくになれば守るが, 損になると思ったら守らなくてよい。
- (ロ) やれときめられていたわけではないから, 親や先生にほめられることなら守るが, ほめられないことはべつに守らない。
- (ハ) 計画や規則は守ることがたいせつだから, いちどきめたことは守る。
- (ニ) あまりむりにならないように計画をたてて, そのかわり他の人にめいわくのかからないようにする。

()

6) Aさんの組のBさんは先生によくほめられます。先生のおっしゃることはよく守るし, よく勉強はできるし, 皆にやさしいといわれています。ところが, Bさんのことを, 先生のごきげんばかりとっているといって, かげ口や悪口をいう人たちもいます。

- (イ) Bさんがほめられるのは理由があるのだから, Bさんのようになろうとする。
- (ロ) 人の悪口をいうのはよくないことだから, Bさんの悪口をいわない。
- (ハ) Bさんがほめられてばかりいるのはしゃくにさわるから, 悪口をいう。
- (ニ) 仲間の人たちがBさんの悪口をいうのはほんとうだと思ふから, 先生にわからなければ悪口をいう。

()

7) Aさんが登校の途中, おくれそうになって急いでいるときに, 知らない人から道を聞かれました。説明してもなかなかわかりません。その人

もこまっているようです。でもこれ以上説明していたら、ちこくしてしまいます。

- (イ) 先生や友だちがみとめてほめられそうならもっと説明するが、ちこくして先生におこられそうなら説明をやめる。
- (ロ) 知らない人に自分をぎせいにしてまでそんなことをしなくてもよいから、とちゅうでちこくしそうだと走っていく。
- (ハ) その人がほんとうに困っていたらかわいそうだから、もっと説明してあげて、先生にはあとでちこくのわけをよく話す。
- (ニ) 困っている人には親切にしてあげなさいといわれているから、ちこくすると自分が困るが、もっと説明してあげる。

()

8) たくさんの物をかかえて、Aさんの前を歩いていた人が、何かひとつポロッと落としてしまいました。でもその人は気づきません。Aさんはひろって走って行ってその人に渡してあげました。しかしその人はありがとうとも言わないで、受けとったままどんどん行ってしまいました。

- (イ) ひとがせっかくひろってあげたのに、何も言わないで行ってしまうなんてひどい人だとむっとする。
- (ロ) その人はよほど急いでいたのか、ほかの考えごとで頭がいっぱいになっていたのだろうと考え、でも自分はそんなことはしないよう気をつける。
- (ハ) 落とした物をひろってあげるのはよいことだから、すこしぐらいいやな思いをしても、ひろってあげる。
- (ニ) ひろってもありがとうと言わないのなら、この次からは、落とし物をみても、見て見ぬふりをして、だれかにまかせる。

()

9) クラスの中で、よくふざけたり、弱い者いじめしたりするBさんが、先生に見つかって注意されています。皆はそれをみて笑っています。実はAさんも前にBさんにいじめられたことがあるのです。

- (イ) いじめたりふざけたりするのはよくないことだが、だからといって注意されているのを見て笑ってはいけないと思う。
- (ロ) よくないことをするBさんが注意されるのを見るのは、いい気味だと思う。
- (ハ) 皆も笑っているのだから、自分だっていっしょになって笑ってもよくだろうと思う。
- (ニ) Bさんはもちろんよくないが、自分は他の人が注意されるのを笑うようなことはするまいと思う。

()

10) Aさんのチームには、ひとりへたなBさんが入っています。Bさんが失敗したために負けたこともあります。そこで、Aさんのチームでは、Bさんをメンバーからはずそうと言っています。でもBさんは、別にわるきがあってやっているのではなく、いっしょうけんめいやっているのです。

- (イ) こういうことは皆の意見できめるべきだから、多数決できめればよい。
- (ロ) Bさんをメンバーからはずすのはかわいそうだし、へたでもねっしんなBさんはチームにとってもたいせつだ。
- (ハ) 人は失敗することだってあるのだから、メンバーからはずすことはやめるべきだ。
- (ニ) チームはやはり勝つことがたいせつなのに、Bさんのためにチームがめいわくするのだから、メンバーからはずすべきだ。

()

11) Aさんは、自分の組のBさんが、何人かの年上の人に取りかこまれていじめられているのを見ました。自分が手をだしてもとてまかないそうにありません。Aさんもこわい気もします。

- (イ) 口を出して自分までいじめられたらそんだから、しらないふりをする。

(ロ) もし自分がBさんだっただらと思って、こわくても勇気をだしてBさんの手助けをるす。

(ハ) 先生か親かだれかにいいつける。

(ニ) 友だちがいじめられているのを見すごしてはいけないから、こわくてもBさんの手助けをする。

()

12) Aさんは本屋に行って、500円をだして雑誌を買っておつりをもらって帰りました。家に帰って調べてみたら、500円多くなっています。そのとき店はこんでいましたし、おつりを渡したのは見習いの若い店員でした。どうもその店員がうっかり500円を1,000円とまちがえて、おつりをくれたようです。一方、Aさんはこの雑誌のほかにも、今すぐに買いたいものがあります。そしてこの500円があればそれは買えるのです。

(イ) こういうことは正しくないから、買いたいものがあったとしても、500円は返す。

(ロ) 自分がわるいわけでないし、ちょうどよいから、その500円で買いたいものを買う。

(ハ) 店員があとで困るだろうし、自分の気持がゆるさないで返す。

(ニ) おつりを多くもらいすぎたことが、親や友だちにわかると困るから返す。

()

13) 宿題にでた工作はとてもむずかしそうです。Aさんもやってみましたが、なかなかうまくいきません。家の人を手伝ってくれるといひます。いい作品はクラスの代表として、展らん会に出品されることになっています。

(イ) 自分で努力して作るのはたいへんでも、あとで楽しいからひとりでやる。

(ロ) 友だちも皆手伝ってもらっているらしいから、自分だけひとりで苦労することはない。

- (ハ) 宿題はひとりでやるべきものだから、最後までひとりでやる。
 (ニ) 自分も楽ができて、いい作品ができればよいから、たまには手伝ってもらってもよい。

()

14) Aさんは公園に遊びに行きました。「立入禁止」のところはさすがにすいていて、そこだと、車や人ごみを気にしないで、のびのびと遊べます。友だちのBさんとCさんはすでに中に入ってしきりにAさんと呼んでいます。管理人も見あたりません。

- (イ) もし管理人に見つかってしかられるといやだから、がまんして入らない。
 (ロ) 「立入禁止」の規則のところには入っていけないから入らない。
 (ハ) 入って遊ぶと、芝生もあらされて台なしになるし、公園は皆のものだから入らない。
 (ニ) だれも見えていないのだから、中に入って友だちとのびのびと楽しく遊ぶ。

()

15) テストのとき、Aさんはある問題がよくできなくて困っています。日頃仲よしの隣の席のBさんが答案をみえるようにしてくれているようにも思えます。そのテストの結果は成績にかんけいすると先生からは言われています。先生はカンニングにはとてもきびしいのです。

- (イ) ほかの人の答案をみてはいけないことになっているから、Bさんの答案をみない。
 (ロ) 先生にみつきりそうになればBさんの答をうつすが、もしみつきりそうならがまんする。
 (ハ) 苦勞せずに、いい成績をおさめられればよいから、この場合こっそりみて、その答を書いてしまう。
 (ニ) そんなことをしたら、先生を裏切ることになり、Bさんを裏切ることにもなるからみない。

()

16) Aさんはひょうばんになっている展覧会に行きました。ところがとても長い行列です。これではいつまで待たなくてはならないかもわかりません。前の方には話しこんでいる人たちもいるので、その行列の中に入り込むことができるかもしれません。Aさんも早く見たいし、帰りがあまりおそくなっても困ります。

- (イ) ほかの人だって早く見たいのに待っているのだから待っているか、また別の日に来るかする。
- (ロ) 人に気づかれぬように、こっそりと中に入りこんで早くみる。
- (ハ) 人に見つかってしかられそうか、見つかりそうにないかようすをよくみてから入り込むか待つかをきめる。
- (ニ) 早く見たくてしかたがないが、順番は守らなくてはいけないから待っている。

()

_____ 学校 _____ 年 _____ 組 _____ 番

氏名： _____ (男・女)
(○でかこむ)

4つの問いを全部よく読んでから、書き入れてください。もし3人いなければ、いるだけ書いてください。

1. あなたのクラスには、自分自身のしっかりした考えをもち、親切で、心があたたかく、あなたがこまっている時には、あなたのことを自分のことのようにしんぱいし、助けてくれる人がいますか？ それはだれですか？

(1) _____ (2) _____ (3) _____

2. あなたのクラスには、自分自身のしっかりした考えをもち、親切なのですが、規則はどうしてもまもらなくてはいけないと思って、自由に考えられなくなることのある人がいますか？ それはだれですか？

(1) _____ (2) _____ (3) _____

3. あなたのクラスには、先生やお父さん・お母さんだとか、友だちのいうことはよく聞くが、自分自身のしっかりした考えはもっていない人がいますか？ それはだれですか？

(1) _____ (2) _____ (3) _____

4. あなたのクラスには、自分勝手に、他の人のことをあまり考えず、自分のとくになることならするが、自分の損になることはやらない人がいますか？ それはだれですか？

(1) _____ (2) _____ (3) _____

- (8) テストの施行：こうして試作されたテストは、筆者らの共同研究者の1人、発智弘雄氏（当時入間市教育委員会指導室長）を通じ、入間市の小・中学校で、担任教諭が実施した。その施行時は1972年4月であった。

結果：上記の手続きによって得られた小学校4年から中学3年にいたる各学年別の反応を、学校・学級別に表示したものが、表1—3および表1—4である。

- (1) 道徳判断反応の学年別発達の推移の傾向

表1—3および表1—4から明らかなように、全体としてAとBの反応が少なく、CとDとの反応の比率が高い。低学年ではAとBとの反応が相対的に多く、高学年ではCとDとの反応が相対的に多いというような発達の推移の傾向は、このテスト状況における子どもの道徳判断の選択反応による限りではよく認められない。

- (2) 道徳判断反応の性差

各学級別、各学年別、各学校別に道徳判断反応の性差を検討すると、その大多数の比較において、男子は女子に比して、相対的にAおよびBの反応が多く、女子は男子以上に、CとDとの反応が多く、その間には有意差が認められた。

- (3) 各人別反応類型

16の設問に対する反応が、A・B・C・Dのいずれかにのみ片寄るもの

表 1-3 道徳性の発達段階類型別の選択数および16問中の平均選択数 (小学4年, 5年, 6年) (上段: 選択数, 下段: 16問中の平均選択数)

学校・学年	東4-1 金4-2 藤4-1		東5-2 金5-1 藤5-1 宮5-1		東6-1 金6-2 藤6-1 狭6-1							
	人数	20	20	20	19	16	14	13	17	20	26	
男子	人数	18	20	20	20	19	16	14	13	17	26	
	A	78 (4.33)	32 (1.60)	12 (0.60)	37 (1.85)	27 (1.42)	4 (0.25)	10 (0.71)	38 (2.92)	15 (0.88)	26 (1.30)	16 (0.62)
	B	36 (2.00)	26 (1.30)	6 (0.30)	20 (1.00)	19 (1.00)	7 (0.44)	10 (0.71)	27 (2.08)	20 (1.78)	29 (1.45)	8 (0.31)
	C	84 (4.67)	137 (6.85)	138 (6.90)	105 (5.25)	120 (6.32)	112 (7.00)	67 (4.79)	62 (4.77)	109 (6.41)	99 (4.95)	129 (4.96)
D	90 (5.00)	125 (6.25)	164 (8.20)	156 (7.80)	136 (7.16)	133 (8.31)	137 (9.79)	81 (6.23)	127 (7.48)	166 (8.30)	260 (10.00)	
女子	人数	17	16	17	21	21	14	15	20	23	14	12
	A	34 (2.00)	10 (0.63)	8 (0.47)	13 (0.62)	15 (0.71)	2 (0.14)	4 (0.27)	16 (0.80)	37 (1.61)	10 (0.71)	10 (0.83)
	B	24 (1.41)	21 (1.31)	10 (0.59)	6 (0.29)	8 (0.38)	2 (0.14)	6 (0.40)	18 (0.90)	19 (0.83)	9 (0.64)	7 (0.58)
	C	97 (5.71)	110 (6.88)	106 (6.24)	138 (6.57)	133 (6.33)	90 (6.43)	76 (5.07)	131 (6.55)	128 (5.57)	61 (4.36)	63 (5.25)
D	118 (6.94)	115 (7.19)	148 (8.71)	178 (8.48)	180 (8.57)	130 (9.29)	154 (10.27)	155 (7.75)	183 (7.96)	135 (9.64)	111 (9.25)	

表1-4 道徳性の発達段階類型別の選抜数および選抜比率 (中学1年, 2年, 3年,) (上段: 選抜数, 下段: 16問中の平均選抜数)

学校・学年	豊1-1 豊1-6 武1-4 西1-B 藤1-C				豊2-2 豊2-5 武2-4 西2-A 藤2-C				豊3-3 豊3-4 武3-3 西3-B 藤3-B 藤3-D								
	18	21	21	20	18	19	18	21	20	18	24	24	18	20			
人数	18	21	21	20	18	19	18	21	20	18	24	24	17	20			
男子	A	20 (1.11)	20 (0.95)	34 (1.62)	55 (2.75)	18 (1.00)	19 (1.00)	54 (3.00)	61 (2.91)	47 (2.35)	60 (3.33)	67 (2.79)	100 (4.17)	46 (2.56)	70 (3.89)	53 (2.65)	
	B	13 (0.72)	13 (0.62)	28 (1.33)	36 (1.80)	20 (1.11)	11 (0.58)	23 (1.28)	44 (2.10)	20 (1.00)	32 (1.78)	26 (1.08)	46 (1.92)	26 (1.44)	14 (1.22)	22 (0.85)	19 (0.85)
	C	95 (5.28)	94 (4.48)	116 (5.52)	92 (4.60)	100 (5.56)	88 (4.63)	75 (4.17)	88 (4.19)	93 (4.65)	67 (3.72)	108 (4.50)	85 (3.54)	79 (4.39)	82 (4.82)	76 (4.22)	87 (4.35)
	D	158 (8.78)	199 (9.48)	149 (7.10)	134 (6.70)	150 (8.33)	177 (9.32)	135 (7.50)	138 (6.57)	157 (7.85)	129 (7.17)	179 (7.46)	153 (6.38)	137 (7.61)	125 (7.35)	119 (6.61)	146 (7.30)

学校・学年	豊1-1 豊1-6 武1-4 西1-B 藤1-C				豊2-2 豊2-5 武2-4 西2-A 藤2-C				豊3-3 豊3-4 武3-3 西3-B 藤3-B 藤3-D								
	18	21	21	20	18 <th>19</th> <th>18</th> <th>21</th> <th>20</th> <th>18</th> <th>24</th> <th>24</th> <th>17</th> <th>20</th>	19	18	21	20	18	24	24	17	20			
人数	22	21	20	21	18	19	18	21	17	18	18	19	17	15	17		
女子	A	21 (0.95)	20 (0.95)	27 (1.35)	26 (1.24)	17 (0.94)	20 (1.05)	61 (2.90)	29 (1.71)	39 (2.17)	29 (1.71)	24 (1.33)	42 (2.21)	27 (1.50)	40 (2.35)	19 (1.27)	13 (0.77)
	B	14 (0.64)	8 (0.38)	22 (1.11)	30 (1.43)	14 (0.78)	10 (0.53)	32 (1.52)	26 (1.53)	10 (0.56)	16 (0.94)	20 (1.11)	33 (1.74)	20 (1.11)	14 (0.82)	13 (0.87)	12 (0.71)
	C	96 (4.36)	96 (4.57)	102 (5.10)	98 (4.67)	91 (5.06)	66 (3.47)	98 (4.67)	75 (4.41)	106 (5.89)	74 (4.35)	89 (4.94)	73 (3.84)	86 (4.78)	77 (4.53)	81 (5.40)	79 (4.65)
	D	219 (9.95)	212 (10.10)	162 (8.10)	181 (8.62)	158 (8.78)	195 (10.26)	143 (6.81)	135 (7.94)	126 (7.00)	153 (9.00)	147 (8.17)	152 (8.00)	155 (8.61)	141 (8.29)	126 (8.40)	166 (9.77)

表 1-5 小学校4年生の各人別反応類型

性 \ 類型	A	B	C	D	混 合	計
男	6	1	4	5	2	18
女	0	0	3	7	7	17

表 1-6 中学校3年生の各人別反応類型

性 \ 類型	A	B	C	D	混 合	計
男	1	0	3	7	6	17
女	1	0	0	10	6	17

は一般に少ない。そのいずれかに半数(8)以上が入るような反応をした者を、A・B・C・Dのいずれかの型とし、それ以外の者を仮りに混合型として、小学校4年および中学校3年各1学級の場合を例示したものが表1-5および1-6である。

(4) 自己評定と他者評定との関係

ゲス・フー・テストの形式により、典型的なA・B・C・Dの類型に入ると思われる者を3名以内ずつ記入させたが、随意としたため、その反応数は、道徳性テストへの反応とは異なり、相対的に少なかった。しかしA類型として多くの他者から挙げられる者は、相対的にA反応が多く、またD類型として多くの他者から挙げられる者は、原則として、DまたはCの反応をすることが圧倒的に多かった。ただし他者評定ではA類型に挙げられる者でも、自己評定ではC・Dの反応が多い者もある。けれども、他者評定でCまたはDの類型として多くの人に挙げられている者の中には、自己評定で、A・B反応が相対的に多い者は皆無であった。

考察：試作された本テストの妥当性・信頼性に関しては未だ検討されるべき多くのことが残されている。まず、発達の推移に関して顕著な差が見出されなかったのは、このような形式のテストによる限りでは、やはりいわゆる建て前的な反応が多くでやすいことを反映しているのかもしれない。

すなわち、Aさんならどうすると思うかと問われても、望ましい反応は何かを判断して、CないしはDを選択する傾向があるのではなかろうか。したがって、道徳判断反応における認知的側面が優位に作用しやすく、やはり何らかのしかたで具体的行為との関連が吟味されるべきであろう。ただし、どのような判断が適切かという基準に関しては、小学校4年生までの段階において、すでに一般に一応の基準ができていることを反映する結果であるとも解することはできるであろう。道徳性テストを、このような多肢選択の方式で施行することの意義と制約は、自由記述式、投映的形式のものとの対比で、また具体的行為との関連で検討されねばならないであろう。したがって、本テストはあくまでも予備的試作の段階のものであるにすぎないが、それにもかかわらず、この種テストがほとんどないので、道徳判断反応をみるひとつの基礎的資料蒐集の具であるとみなすことはできるであろう。

（その2）準拠人選択反応と道徳判断反応の全般的特徴

目的：同一被験者群に、準拠人選択調査および道徳判断反応調査を同時に施行して、それらの全般的特徴をみるとともに、その間の関連を吟味すること。

方法： 調査具 (i) 筆者らの作成になる準拠集団調査（古畑・向井，1975, 58—59頁参照）の中の“現実水準”に関する10の設問 (ii) 同じく筆者らの試作した道徳性テスト16の場面の中から、部分的に改訂して選出した10の場面（元のテストでは，1，4，5，6，7，9，12，13，14，16の設問であり，そのうち5と7については改訂を施したもの）に対する4肢選択反応，(iii) 選択（勉強・相談）に関する2問，排斥に関する1問を含む交友関係調査，以上を組にした質問紙を使用した。（ただし (iii) に関する資料とクロスさせた分析結果についてはここでは触れない）

被験者：(イ)小学校6年男子49名，女子46名計95名。(ロ)小学校4年男子21名，女子18名計39名。

調査時：1974年3月および4月，

施行手続き：筆者らが，校長・担任教諭に趣意，施行要領を説明の上，担任教諭を通じて施行

結果：

(1) 準拠人選択反応の全般的傾向

個人差・場面差をこえた準拠人選択の全般的傾向を纏めたのが表2-1である。その表から明らかであるように，①4年生の場合には，家族殊に父母が選択される傾向が顕著にみられる。②4年生は，男女とも母親を第1位に選択しているが，6年生の場合には，同性の親が第1位に選択されている。③友人は，6年生では男女とも同性の親に次ぎ第2位に選択されているが，4年生では選択されることがきわめて少ない。④兄弟姉妹は同性のものが選択される傾向があり，6年生では4年生よりも，その選択比率は小さくなっている。以上の全般的傾向は，第1報告に示した結果と合致し，友人選択の比率は中学生の場合にはさらに高いと予想される。

次に場面別にみると，6年生の場合には，具体的生活場面では友人選択の頻度が相対的に高く，抽象的場面では家族を選択する頻度が高い。4年生の場合には，友人選択の比率が低いため，場面によるそのような選択の分化はみられない。

表 2-1 学年・性別準拠人選択数・選択比率

対 象		父	母	兄 弟	姉 妹	友 人	その他	計
学年・性								
6	男 (N=49)	166 (33.9)	120 (24.5)	38 (7.7)	10 (2.0)	142 (28.9)	12 (2.5)	490
6	女 (N=46)	130 (28.3)	170 (36.9)	20 (4.3)	36 (7.8)	164 (35.6)	11 (2.4)	460
4	男 (N=21)	66 (31.6)	86 (41.1)	44 (21.1)	7 (3.3)	8 (3.8)	1 (0.5)	209
4	女 (N=18)	37 (20.7)	85 (47.9)	16 (8.9)	17 (9.5)	22 (12.3)	4 (2.2)	179

表 2-2 学年・性別道徳判断類型選択数・選択比率

類 型		A	B	C	D	計
学年・性						
6	男 (N=49)	68 (13.9)	60 (12.2)	111 (22.6)	251 (51.2)	490
6	女 (N=46)	58 (12.6)	49 (10.7)	94 (20.5)	258 (56.2)	456
4	男 (N=21)	19 (9.1)	22 (10.5)	85 (40.9)	82 (39.4)	208
4	女 (N=18)	6 (3.4)	10 (5.6)	85 (48.0)	76 (42.9)	177

(2) 道徳判断反応の全般的傾向

まず個人差，場面差をこえた道徳判断の全般的傾向を纏めたのが表 2-2 である。

①学年，性にかかわらず顕著な傾向は，AとBの反応が少なく，CとDの反応が多いということである。このことは，（その1）においてもみたように，4年生までには，このようなテスト状況においては，規範遵守型反応がかなり優勢になってきていることを反映する結果である。②前述の傾向は，女子の場合にいっそう顕著に認められる。4年生の場合には，統計的に有意な性差がみられた。すなわち，女子はC・Dが相対的には多く，男子はA・Bが相対的には多かった。 $(x^2=9.057, 3df, p<.05)$ 。③学年差は，男女別にみても，男女を合計しても，有意に認められる。（たとえば，合計した場合には， $x^2=79.87, 3df, p<.005$ ）。4年に多くみられるのはCであり，6年に多くみられるのはDである。A・Bは，4年の方がいっそう少ない。

(3) 準拠人選択の類型

10場面を通じて，準拠人選択には，はたして各人別に一定の傾向が認められるものか。第1報告（その3）に示した基準（古畑・向井，1975，79

表2—3 学年別準拠人選択類型

類 型		家 族 型	家 族 + 友 人	そ の 他	計
学 年					
6	年	12	19	1	32
4	年	32	4	5	41
計		44	23	6	73

頁参照)で類型化を試みると、中学生に比し友人選択の比率が低いため、いかなる場面においても友人を選択するいわゆる友人型はほとんど得られない。これに対し、父・母を主として家族中心に選択がなされる類型は比較的多い。友人を相対的に多く選択する者も、いくつかの場面では家族を選択する傾向がある。そこで、家族型と、家族+友人でほとんどの選択がなされる型と、前記のいずれにも分類しがたいその他とに一応分類し直したものが、表2—3に要約してある。それによれば、4年生では家族型が大多数を占めるが、6年生の場合には、家族+友人の混合の類型が過半数を占めるようになっている。(χ²=19.722, 2df, p<.005, ただし Yates による修正を施した値)

これは第1報告で示した、中学生の準拠人選択における友人型の増大という顕著な推移傾向への過渡的段階を示唆する結果である。

(4) 道德判断反応の類型

10問にわたって提示した葛藤的情況を含む道德判断場面に対する反応を各人別に吟味すると、4類型のいずれかが顕著に選択されているものは、C・Dに関しては認められるが、A・Bの出現頻度は少ないため、A・Bのいずれかのみが優位な反応は認められない。そこで相対的頻度により、それぞれの反応数が上位4分の1以内に入るものをとると、AとBはそれぞれ10問中2以上、Cは5以上、Dは6以上となる。この基準を基に、各人別に10問を通しての反応を整理すると、混合型は多岐にのぼる。これを

表 2—4 学年別道徳判断反応の類型

学 年	類 型		計
	A・B型	C・D型	
6 年	17	14	31
4 年	12	27	39
計	29	41	70

さらに単純化すると、結局、A・Bの双方ないしは一方を2以上含むものと、A・Bが1以下で、C・Dのいずれかまたは双方が優位を占める群とに二大別できる。それを学年別に纏めたのが表2—4である。この表による限りでは、有意ではないが、6年生の中にかえって、A・Bを相対的に選択している者が多く、年生の方がよりC・D型の反応を選択する傾向がある。 $(\chi^2=3,419, 1df, p<.10)$

(5) 準拠人選択の類型と道徳判断反応の類型との関連

以上の基礎資料に基づき、一応この両類型間の関連の有無をみたものが、表2—5である。このような指標による限りでは有意な連関は認められない。

考察：本報告のこの部分では、筆者らの試作になる準拠人調査と道徳判断反応テストを同一被験児群に施行して、その全般的傾向を吟味するとともに、その両テスト間の関連をみようとしたものであった。もとよりこれは

表 2—5 準拠人類型と道徳判断類型

道徳判断	準拠人		計
	家 族 型	家族+友人	
A・B 型	16	11	27
C・D 型	26	12	38
計	42	23	65

一定時点における実態の一端を“相関的”方法によってみる基礎的な資料でしかない。しかし2, 3の基礎的事実は確認された。まず、準拠人選択に関しては、4年生では家族型が多く、6年生では家族選択と友人選択との混合型が多くなっており、第1報告の結果と相俟ち、子どもの準拠人が家族から友人へと推移していくことをうかがわせる結果であった。

つぎに、道徳判断反応は、このようなテスト状況では、4年生までには規範遵守型反応が優位にみられるようになってきている。したがって、このままでは、4年生と6年生との間における、この点に関する発達の推移をみるには必ずしも好適な指標とはいえない。

以上のような結果から、次のような諸点が今後の課題の中に含まれるべきであろう。まず、CとDと称した反応が小学校4年生までにはできやすいとすれば、固定的な規範遵守型反応と、より柔軟な合理的現実的規範遵守型反応との差異を際立たせるような手続きの開発は考えられるべきであろう。そのひとつとして、道徳判断反応の求め方を改訂することも考えられるべきである。4肢選択反応だけでなく、その理由を問う方法などは導入してよいであろう。また、このようなテスト状況だけでなく、特定の具体的行動場面での反応の観察や、面接の手法も探るべきであろう。そのような手法をとれば、より低年齢段階層の子どもの資料も得やすいであろう。その一環として、次に略述する(その3)のような実験的方法による一定の操作を通じて、子どもの道徳判断は吟味されていくべきであろう。

(その3) 自己と準拠人の道徳判断反応の一致・不一致の、その反応の一貫性・変化に及ぼす効果

目的：子どもの自分自身の道徳判断反応と、準拠人の道徳判断反応の一致・不一致についての認知が、それ以降の自己の道徳判断反応の一貫性ないしはその変化に及ぼす効果につき、実験的に検討すること。

方法：

- (1) 被験者：都下三鷹市 I 小学校 4 年生男子 21 名，女子 18 名計 39 名，
- (2) 実験時期：1974 年 4 月。1 週間間隔で各児に 2 回ずつ施行
- (3) 実験手続き：まず，（その 2）と同様の手続きで，同一調査資料を一斉に施行する。

その 1 週間後に，実験的個別面接の形式で，道徳判断に関して資料を蒐集する。面接者は筆者ら 3 名の他，ICU 大学院教育心理学専攻および学部 4 年心理学専攻学生計 6 名合計 9 名。1 被験者あたりの所要時間は 25～30 分。

その部分の手続きは次の通りである。まず氏名を確認した後，先に施行した道徳判断反応調査の第 1 問につき，被験者自身の気持に一番あてはまるものを，4 肢選択の反応の中から選ばせ，ついでその理由を問うた。これが事前判断である。次にあらかじめ筆者らの設定した，後述するようないかたでの，同一の問いに対する準拠人の道徳判断反応（仮説的なもの）を提示し，それに対して被験者はどのように思うか，その言語的反応を求めた。最後に，それまでのことを考慮した上で，被験者の気持に一番あてはまるものを，4 肢選択の反応類型の中から再び選択させた。これが事後判断である。以下，同様な手続きで第 2 問から第 10 問まで順次行った。

さて，ここでの準拠人としては，両親および親友を用いた。親友に関しては，（その 2）にも示したような，一斉調査の際に，あわせ施行した交友関係調査において，被験者が実際に第 1 位に選択していた友人を用いた。

準拠人の道徳判断反応の提示の仕方は，次表（3—1）に示す通りに予め定めておいた。

すなわち被験者 10 人を 1 つの単位として，被験者 1 に対しては，第 1 問から第 4 問までは仲のよい友だちが，A・B・C・D の判断をしたこととし，第 5 問は，被験者がどんな判断をしたにせよ，準拠人の判断は，被験者の事前の判断と同一とし，第 6 問から第 9 問までは，お父さんやお母さんなど家の人，A・B・C・D の判断をそれぞれしたこととし，第 10 問は，被験者の判断いかんにかかわらず，準拠人の判断は，被験者の事前の

表 3-1 準拠人の道德判断反応の提示の仕方

被験者 問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	I-A	B	C	D	S	II-A	B	C	D	S
2	I-B	C	D	S	A	II-B	C	D	S	A
3	I-C	D	S	A	B	II-C	D	S	A	B
4	I-D	S	A	B	C	II-D	S	A	B	C
5	I-S	A	B	C	D	II-S	A	B	C	D
6	II-A	B	C	D	S	I-A	B	C	D	S
7	II-B	C	D	S	A	I-B	C	D	S	A
8	II-C	D	S	A	B	I-C	D	S	A	B
9	II-D	S	A	B	C	I-D	S	A	B	C
10	II-S	A	B	C	D	I-S	A	B	C	D

(注) I: 仲のよい友だち
 II: お父さんやお母さんなど家の人
 S: 被験者の事前判断と同じ反応

判断と同一として提示したのである。被験者2に対しては、第1問への準拠人の判断はBとして提示し、被験者1よりひとつずつ繰り上げて示し、被験者3に対しては、準拠人の判断がCから始まるような系列にしたものである。以下同様にして、準拠人の判断をひとつずつずらして提示し、被験者11に対しては、被験者1に対すると全く同様な準拠人判断の提示となるように考案したものである。したがって、どの被験者も、10問中の最低2問は、準拠人の反応が被験者の反応と同じ反応をしているとの経験をするようになっていた。

結果:

(1) 事前判断と事後判断における変化

まず被験者が事前にAの判断をしていた場合には、B・C・Dの判断をしていた場合に比して、事後の判断を変化させる比率が高かった。 $(\chi^2 = 11.163, 3df, p < .02)$ (表3-2参照)

この結果を、被験者の事前判断が準拠人の判断と一致していた場合(表3-3)と、不一致であった場合(表3-4)とに分けてみると、前者の

場合にはその傾向がみられなかったが ($x^2=4.785, 3df, N.S.$), 不一致の場合に被験者が事前にAの判断をしていると, 事後判断で変化がしやすいことが明らかとなった ($x^2=10.536, 3df, p<.02$).

表 3—2 事前判断の類型と事後判断における変化の有・無

事前 事後	A	B	C	D	計
変 化	10(.556)	7(.259)	38(.264)	40(.206)	95
無 変 化	8(.444)	20(.741)	106(.736)	154(.774)	198
計	18	27	144	194	383

表 3—3 事前判断の類型と事後判断における変化
(事前判断と準拠人判断が一致していた場合)

事前 事後	A	B	C	D	計
変 化	3	6	16	13	38
無 変 化	4	11	38	60	113
計	7	17	54	73	151

表 3—4 事前判断の類型と事後判断における変化
(事前判断と準拠人判断が一致していない場合)

事前 事後	A	B	C	D	計
変 化	7	1	22	27	57
無 変 化	4	9	68	94	175
計	11	10	90	121	232

(2) 準拠人判断の提示と事後判断における変化：

提示された準拠人の判断と被験者の事前判断が一致している場合と一致していない場合の間で、事後判断における変化の仕方には差がみられなかった ($x^2=0.018, 1df, N.S.$) (表 3—5)。ただし事前判断がAであった場合には、準拠人の判断と被験者の判断が不一致のときの方が、一致しているときよりも、被験者の事後判断が変化した事例は多かった。次に準拠人判断を、両親として提示した場合と、親友とした場合の間でも、事後判断の変化の仕方には差がみられなかった ($x^2=0.016, 1df, N.S.$) (表 3—6)。

表 3—5 準拠人判断との一致・不一致と被験者の事後の判断の変化

事後 事前と準拠人	変 化	無 変 化	計
一 致	38	113	158
不 一 致	57	175	232
計	95	288	383

表 3—6 準拠人判断の種類（両親；親友）と被験者の事後判断の変化

事後 準拠人	変 化	無 変 化	計
両 親	49	143	192
親 友	46	145	191
計	95	288	383

(3) 性差：事前判断には性差が認められた。すなわち、女子は男子に比して、C・Dの判断がいっそう多かった(表 3—7 参照)。($x^2=13.503, 3df, p<.005$)

さらに、事後判断において、女子は男子に比し、事前判断を変化させる比率が高かった。(表3-8) ($\chi^2=12.407, 1df, p<.001$) この傾向は、提示された準拠人判断と被験者の事前判断が一致している場合にはみられなかったが ($\chi^2=2.755, 1df, N.S.$) (表3-9), 一致していない場合に認められた ($\chi^2=10.235, 1df, p<.005$) (表3-10)。

表 3-7 事前判断における性差

事前 性	A	B	C	D	計
男	14	21	67	103	205
女	4	6	77	91	178
計	18	27	144	194	383

表 3-8 事後判断の変化の性差

事後 性	変 化	無 変 化	計
男	36	169	205
女	59	119	178
計	95	288	383

表 3-9 判断変化の性差 (事前判断と準拠人判断が一致していた場合)

事後 性	変 化	無 変 化	計
男	17	68	85
女	21	45	66
計	38	113	151

表 3—10 判断变化の性差（事前判断と準拠人判断が一致していない場合）

性	事後	変 化	無 変 化	計
男		19	101	120
女		38	74	112
計		57	175	232

つぎに、準拠人判断を提示した際にとられた被験者の言語反応に関する分析結果を記述する。これは仮説的に提示された準拠人の道德判断を被験者がどのように受けとめたかを、被験者の道德判断反応の変化のデータに加えて、明らかにするために行ったものである。

(4) 提示された準拠人判断に対する被験者の言語反応

その総数は 383 あり、そのうち、329(85.9%) は、肯定的—否定的（善—悪，正—邪，良—否など）の次元でその言語反応は行われた。

(5) 準拠人判断の類型と被験者の言語反応

準拠人の道德判断反応が A または B として提示された場合には、それに対する被験者の言語反応には否定的なものが多く、C または D として提示された場合には、それに対する被験者の言語反応には肯定的なものが多く、表 3—11 から明らかなように、その間には統計的に顕著な連関が認めら

表 3—11 準拠人道德判断反応に対する言語反応

準拠人判断 言語反応	A	B	C	D	計
肯 定 的	4	17	85	93	199
否 定 的	68	52	6	4	130
そ の 他	9	15	15	15	54
計	81	84	106	112	383

表 3—12 事前判断と準拠人判断の一致の場合の言語反応

事前-準拠人 言語反応	A → A	B → B	C → C	D → D	計
肯定的	3	11	47	63	124
否定的	0	0	2	0	2
その他	4	5	6	8	23
計	7	16	55	71	149

れた。 $(\chi^2=220.03, 3df, p<.001)$ 。

(6) 事前判断と準拠人判断とが一致している場合の言語反応

被験者の事前判断と提示された準拠人判断が一致していた場合には、そのうち約83.2%は準拠人の判断に被験者は肯定的な言語反応をしており、否定的反応はわずか2例のみであった。(表3—12参照)。そして肯定的反応をした124例中、93例(75%)は事前判断をそのまま事後まで維持していた。

ところで、先に表3—11において、準拠人判断としてBの反応が提示された場合には、それに対する被験者の言語反応には否定的なものが多いことを示したが、これも被験者の事前判断との関係で詳しくみると、被験者が事前判断でCまたはDの反応を選択している場合にはその傾向がみられたけれども、被験者がBの反応を選択していた場合、すなわち準拠人自身の反応と一致していた場合には、被験者は肯定的反応をしていることが知られる。(表3—13参照； $\chi^2=31.97, 2df, p<.001$)。この11例中8例は、事前判断を事後まで維持していた。さらに、被験者の事前判断と準拠人判断が一致していた場合には、一致していることを確認しているような言語反応(たとえば、“私といっしょだなあ”など)もみられた。その場合には、事後での判断の変化はみられなかった。

表 3-13 被験者の事前判断がBの場合の準拠人判断と被験者の言語反応

準拠人判断 言語反応	A	B	C	D	計
肯定的	1	11	3	2	17
否定的	2	1	19	30	52
その他	1	5	3	6	15
計	4	17	25	38	84

(7) 事前判断と準拠人判断が一致していない場合

既にみたように、被験者が事前に、C・Dの判断をしている場合には、AまたはBの準拠人判断を提示しても、それは否定的にとらえられることが多かった。また、準拠人の判断を提示しても、“お父さんがそんなことを言うはずはない”などの反応もあり、そのような場合には、準拠人の判断と一致させるような、事後判断の変化はみられなかった。

被験者の事前判断がA・Bのときに、準拠人判断としてC・Dを提示した場合には、事例は多くないけれども、“～君が～なら、僕もそうする”などのように準拠人の判断への同調を示す言語反応をするものもあり、そのような場合には、事後判断を変化させた。

考察：

本実験においては、被験者の事前の道德判断反応を求めたのち、準拠人の判断を仮設的なかたちで提示し、事前判断との一致、不一致が、被験者の事後判断に一定の効果をもつかいなかを検討しようとしたものであった。被験者の事前の判断がAであった場合などを除き、事後判断の変化に関しては識別しうる効果をもちえなかった。

それは、ひとつには、本実験の被験者は、概して、C・Dの道德判断反応の類型に対してはよしとし、A・Bはよしとしないような判断の規範的基準が既に一応できている者が多かったことによっていると思われる。また、事前判断の理由を問うたことが、被験者に対し、その判断をしたこと

に対する一種の公的コミットメントをさせることともなり、それが事後判断の変化への抵抗を与えるように作用したとも考えられる。さらに、仮説的に提示した準拠人の判断に対し、それを必ずしも真剣にないし深刻に受けとめず、不一致であっても必ずしも葛藤の経験には至らなかったとも考えられる。

しかしながら準拠人の判断に対する言語反応を吟味してみると、一般に被験者は自己の判断と準拠人の判断とが一致している場合には準拠人の判断を肯定的に受けとめる傾向があり、不一致の場合には、その判断に否定的に反応する事例は相対的に多く、被験者の事後判断の変化にはみるべき効果はなかったとしても、言語反応の水準では、一致と不一致とでは分化した反応をもたらしていたということ是可以であるであろう。

準拠人の判断を仮設的にではなく、現実のセッティングで提示する場合の問題は、検討されるべきことのひとつである。また、この種道徳判断反応の状況に関しても、同調を誘発しやすい条件と、公的コミットメントをより明確にさせる条件とを設定し、事後判断の変化に及ぼす相対的效果を吟味することなども本実験に基づく今後の課題への示唆となるであろう。

(その4) 親と子の道徳判断反応の比較

目的： 对人的葛藤状況を含む道徳判断の状況で、親子それぞれに、自己の判断ならびに相手の判断についての推測を求め、親子の判断の比較検討を行うこと。

方法：

調査具：筆者らの作成になる道徳性テスト（本報告・その1参照）16場面から部分的改訂を経て選出した10場面（本報告・その2参照）の中から、さらに反応の偏りの少い——すなわち、4類型のいずれの判断もできやすい——場面8を選出し、このたびは4肢選択反応ではなく、各場面で、A・B・C・Dの類型のいずれかひとつのみを提示し、子どもに対しては、

自己および友人・母親の判断を求め、さらにその理由を問う形式の調査用紙を作成した。親に対しては、同一8場面、子どもの判断についての認知および親自身の判断、ならびにその理由を問う調査用紙を別に作成した。

その8場面の概要は次の通りである。なお括弧内に、その状況がどの判断類型に該当するかを示した。

- 1) 混雑のバスで、疲労しているAがやっと座席をみつけて座ったところに老人が乗車、誰も席を譲らない、Aはそのまま目をつぶっている。(A)
- 2) Aは、公園の空いている「立入禁止」の所で遊びたいし、友人のBやCは遊んでいるが、管理人にみつかって叱られることをおそれて、がまんして中に入らない。(B)
- 3) 理科教室の新しい顕微鏡をいじりたいが、先生に許可なく勝手に触れることは禁じられているので、Aはそれにさわらない。(C)
- 4) 悪ふざけ、弱い者いじめをするBが先生にみつきり叱られているのを、皆は笑っている。AもBにいじめられたことがある。Aをいっしょになって笑う。(B)
- 5) 買い物をした後、Aはおつりの方が多いの気付く。店員が間違えらしい。Aはすぐにも買いたい物がある。自分が悪いわけではないからとて、Aはその金で買い物をする。(A)
- 6) Bは先生によく賞められるが、Bのことを先生のごきげんとりという人もたくさんいる。AはBに理があるはずとて、Bのようになろうとする。(D)
- 7) むずかしい宿題の工作を、家人に手伝ってもらい、楽をしていい作品を展覧会に出品できるとよいと、Aは手伝ってもらおう。(A)
- 8) 展覧会の長い行列に、Aは割り込んでも早く中に入りたい。列に割り込む人も他にもいるので、Aも割り込むことにする。(B)

以上のように、8場面中、AとBに該当する状況を3ずつ選出し、C・Dはそれぞれ1つにとどめたのは、従来の4肢選択反応ではC・Dの反応が優位にでて、A・Bは選択されなかったもので、敢えてAとBの状況を相

対的に多くし、それに対し、どう思うか、またその理由を問うことにしたものである。

子どもに対しては、各場面ごとに、次のように問うた。

(イ) あなたはAさんをどう思いますか。(いちばんびったりするものを、1つだけ○でかこんで下さい)。

よい どちらかといえばよい どちらともいえない どちらかといえ
ばわるい わるい

(ロ) どうしてそう(イで答えたように)思うのですか。思ったとおりを、できるだけくわしく書いて下さい。

()

(ハ) あなたの仲のよい友だちなら、Aさんのことをどう思うと思いますか。

よいと思うだろう だいたいよいと思うだろう どちらともいえない、
わからない あまりよくないと思うだろう よくないと思うだ
ろう

(ニ) どうしてそう(ハで答えたように)思うのですか。思ったとおりを、できるだけくわしく書いて下さい。

()

(ホ) では、あなたのお母さんなら、Aさんのことをどう思うと思いますか。

よいと思うだろう だいたいよいと思うだろう どちらともいえない、
わからない あまりよくないと思うだろう よくないと思うだ
ろう

(ヘ) どうしてそう(ホで答えたように)思うのですか。思ったとおりを、できるだけくわしく書いて下さい。

()

また、親に対しては、各場面ごとに、次のように問うた。

(イ) あなたのお子さんだったら、どうすると思いますか。(ひとつだけ

選んで○で囲んで下さい)

Aさんのようにする Aさんのようにすることが多い どちらとも
 いえない, わからない Aさんのようにしないことが多い Aさん
 のようにしない

(ロ) どうしてそう(イのように) 思いますか。できるだけ具体的に詳しく
 書いて下さい。

()

(ハ) では、あなたご自身は、Aさんの判断や行動をどう 思いますか。

(ひとつだけ選んで○で囲んで下さい)

Aさんに賛成; Aさんを認める どちらかといえば、Aさんに賛成;
 Aさんを認める どちらともいえない, わからない どちらかとい
 えば、Aさんに反対; Aさんを認めない Aさんに反対; Aさんを認
 めない

(ニ) どうしてそう(ハのように) 思いますか。できるだけ具体的に詳しく
 書いて下さい。

()

被験者：埼玉県入間市K小5年35名, M小6年29名, F小6年39名; M中
 2年32名, 同3年48名, S中3年43名, 計226名およびその親。

調査時：1975年4月

手続き：各学級担任に趣旨説明の上、調査用紙を配布した。親に対しては
 依頼状を付した。親の応答は子どもを通じて回収した。なお依頼状の根幹
 部は次の通りである。

私どもは、子どものいろいろな生活場面における行動や判断などについて調べ、
 それを教育の場に反映させていきたいと願い、今までにも多様なデータを
 得てまいりました。

今度のこの調査もその一環として行おうとするものです。したがって、あくまで
 も一般的な基礎的なデータを得ようとするものです。是非ご協力下さいますよう
 お願い申し上げます。

さて、つぎのページから、いくつかの短い文章が書いてあります。その中には、

いろいろの場面で、Aさんの考えること、行うことなどが書かれています。Aさんは、あなたのお子様のひとりと同学年、同年齢、同性の人とお考え下さい。その文章をよく読まれて、あなたの思ったとおりにお答え下さい。

なお、これはいわゆるテストではありません。どれが正しいとか、どのように書かなくてはいけないということは全くありません。率直に自由なお考えをお聞かせいただけることが、最も有りがたいことです。

どうぞ趣旨をご諒承下さって、ご協力下さいますよう、重ねてお願い申し上げます。

結果：

ここには、主としてF小6年39名、およびS中3年43名、ならびにその親の資料の分析結果の概要を記述する。その理由の分析結果は次の機会に譲る。

(1) 各場面別の反応分布の傾向

表4-1、表4-2にその反応を例示したように、子一親を通じ、共通した傾向が認められる。

“よい”に偏っているもの……場面3, 2, 6

“わるい”に偏っているもの……場面5, 8, 7

散布度の大きいもの……場面1, 4

大多数がよいとする反応は、類型D(場面6)、C(場面3)、の他に、

表4-1 子の各場面別反応分布(F小6年)

場 面	指標 段 階					子 一 親				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
1	1	2	11	16	9	2	2	9	10	16
2	25	9	3	0	4	22	10	5	0	2
3	33	4	0	1	1	31	3	3	2	0
4	5	4	13	9	8	3	1	10	10	15
5	0	3	2	3	31	2	3	1	4	28
6	25	6	7	1	0	22	5	7	2	1
7	1	1	5	11	21	1	1	5	9	22
8	0	1	6	4	27	0	0	8	5	25

表 4—2 親の各場面別反応分布 (F小6年)

場面	指標									
	親 — イ					親 — ハ				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
1	3	13	8	6	9	2	4	10	18	5
2	23	8	3	4	1	22	7	2	2	5
3	20	11	4	2	1	28	2	2	5	0
4	9	11	7	5	7	9	2	4	13	9
5	0	1	4	4	30	1	0	1	12	25
6	13	8	10	3	4	18	10	6	2	1
7	4	6	0	10	17	4	4	4	7	17
8	1	2	3	9	21	2	3	0	8	22

B (場面2) もひとつあるが、これは理由、動機のいかんにかかわらず、規範規則遵守型行動であるという点では共通している。

大多数がわるいとする反応は、類型A (場面5, 7) の他、B(場面8) がひとつあるが、後者のBは他者志向的同調行動が規則違反のかたちをとったものである。

場面1(A)と場面4(B)の反応が他に比し拡がっているのは、他の場面よりも、外部よりの規制力の強い規則ではないことにもよるものとも思われる。

(2) 親—子の反応分布の比較

親—子の反応の比較は次の4点から行った。

- I 子—イ 対 子—ホ (子どものみた自己と親との道德判断反応)
- II 親—イ 対 親—ハ (親のみた、子どもと親自身の道德判断反応)
- III 子—イ 対 親—イ (子どものみた自己の道德判断反応と、親のみた子どもの反応)
- IV 子—ホ 対 親—ハ (子どものみた親の道德判断反応と、親自身の反応)

まずIに関しては、小・中学校を通じ、また各場面を通じ類似した反応が認められ、有意差のあったのは、S中で1つ(場面6)のみである。子

どもが、このような状況での親の道德判断を自己の判断と一致させがちなことを示す結果である。

Ⅱに関しては、F小6年において、2場面（1，3）で有意差が認められた。（表4—2参照）

最も差が認められたのはⅢに関してであり、F小では8場面中5，S中では3場面で、それぞれ有意差がみられた。その特徴は、いわゆる“よい”場面では、子ども自身の方が親のみた子ども以上にそれをよしとし（例・表4—1，4—2参照，場面3， $\chi^2=9.36, 2df, p<.01$ ）いわゆる“わるい”場面では、子どもの方がAをいっそうわるいとみ、親は子どもほどはわるいとみない（例：表4—1，表4—2参照，場面7， $\chi^2=10.75, 3df, p<.02$ ）方向での差だということである。

最後に、Ⅳに関しては、F小6年で場面1に差がみられたのを除けば、他には有意差はなかった。子どものみた親の道德判断反応と、親自身の反応との間には比較的差が少ないことを示す結果である。

(3) 親—子の反応の一致度の比較

親—子の道德判断反応の一致度を、4つの指標に関して各場面ごとにとったのを纏めたのが表4—3である。全体として、大多数がよい（場面3，2）などまたはわるい（場面5，8など）と判断するような場面では、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳを通じて、反応の一致度は相対的に高く、散布度の大であるもの（場面1，4）は一致度も低い。

Ⅰの一致度，すなわち，子どものみた自己と親との道德判断反応の一致

表 4—3 各場面別，親—子の判断の一致率（N=82）

場面 指標	1	2	3	4	5	6	7	8
Ⅰ	.488	.630	.780	.488	.778	.662	.667	.757
Ⅱ	.375	.595	.562	.397	.747	.560	.583	.618
Ⅲ	.297	.367	.410	.175	.562	.346	.269	.521
Ⅳ	.288	.481	.526	.372	.538	.324	.320	.500

表 4-4 親—子の判断の
一致率の例

	一 致	不一致
I	51	30
III	29	50

度, は, 小中, 男一女を通じ, また各場面を通じて最も高い。その一致度は, IIIと比較すると, 8場面のすべてで有意に高い。表4-4はその1例を表示したものである ($\chi^2=8.21, 1df, p<.01$)。IとIVとを比較すると, 6場面(場面2と4を除く)において, Iの方が有意に高い一

致率を示している。IとIIとの間に関しては, 有意差のあったのは1つ(場面3)だけである。

Iに次いで一致度の高いのは, II, すなわち, 親のみた, 子どもと親自身の道徳判断反応である。IIとIIIとの間では5場面, IIとIVとの間では, 2場面で有意差があった。

さらに, IIIとIVとの一致度に, I, IIのそれよりは低い, 偶然による一致度よりは著しく高い。なお, IIIとIVとの間で有意差のあったのは1場面(場面4)だけである。

考察: 以上みてきたところからも明らかなように, 子どもは自らの道徳判断反応を, 親のそれと一致しているように見做す傾向がある。これは, 子どもが, 自らの判断を準拠対象として挙げられる他者(親や友人のような)の判断と一致ないし類似しているとみがちである傾向を反映するものと考えられる。

道徳判断反応の不一致・ずれについては, 本報告(その5)で言及するが, 理由の分析と相いまってさらに考察がすすめられるべきである。

ここでは, 場面・状況の選択, およびそこに提示する道徳判断・行動の類型を, AやBが多くなるようにしたが, それらの提示の仕方を組織的に変化させ, その上での, 反応の一貫性・安定性を吟味することも今後の課題である。

(その5) 子どもの道徳判断反応と, 自己のみた友人および母親の道徳判断反応との関係の吟味

目的：对人的葛藤情况を含む道德判断を求める情况でとられる特定の行動に対する子どもの判断と、その行動に対する友人および母親の判断を子どもが推測した場合の判断との関係を検討すること。

方法：（その4）で述べた方法による。8場面の道德判断を求める情况で行われた特定の行動に対して、自己の判断および自己からみた友人と母親の判断を、よい——わるい、よいと思うだろう——わるいと思うだろう、の次元で5段階評定させたものである。

結果：

(1) 自己の判断と自己のみた他者の判断との関係

1) 特定の行動に対して下されるよい——わるいの5次元での段階の判断について、自己と他者の判断の一致率を示したのが表5—1である。一致率は、場面によっても、学年によっても多少の変動はあるが、全般的にみれば、友人および母親の判断を自己の判断と一致させて推測している傾向がある。

2) 5段階評定でもかなり高い一致率が認められたが、これをさらに次のように分類した。その子どもの属する学級で、「よい（わるい）」か「どちらかといえばよい（わるい）」という意見が過半数を占める場合に、そ

表 5—1 自己の判断と自己のみた友人および母親の判断の一致率(%)

学年 指標 場面	小 5		小 6		中 2		中 3	
	自・友	自・母	自・友	自・母	自・友	自・母	自・友	自・母
1	57.1	42.9	46.2	48.7	69.4	52.8	67.6	40.5
2	48.6	50.0	66.7	74.4	83.3	75.0	54.1	54.1
3	77.1	77.1	76.9	84.6	91.7	86.1	58.3	72.2
4	74.3	57.1	53.9	51.3	66.7	50.0	64.9	35.1
5	77.1	77.1	74.4	81.6	77.8	83.3	63.9	55.6
6	65.7	78.8	74.4	73.0	80.6	83.3	61.1	69.4
7	74.3	62.9	76.9	82.1	80.6	80.6	75.0	70.3
8	55.9	68.6	76.3	73.7	86.1	83.3	76.5	72.7

の意見をその学級の“多数意見”とし、「どちらともいえない」とか多数意見と反対方向にある意見を纏めて“その他の意見”とする二分法により、自己および自己のみた他者の判断を分類したのである。表5-2は、そのような分類を、典型的な場面8について例示したものである。場面に典型的にみられるように、ほとんどの場面で、すべての学年の子どもが自己と他者の判断を一致させてみる傾向が、このような分類によっても見出された。比較的自他の一致率の低いのは、特定の行動をとっても、その結果が自己に不利益をもたらさないような場面（例・場面1：混んでいるバスに老人が乗ってきたのに、疲れているから座ったまま目をつぶっている場合）

表 5-2 自己の判断と自己のみた友人および母親の判断との関係
（場面1, 4, 5, 8について）（人数）

場 面	学 年 自己の判断 自己のみた 他者の判断		小学5年		小学6年		中学2年		中学3年	
			多数	他	多数	他	多数	他	多数	他
1	対友人	多数意見	18	6	19	6	23	2	9	2
		その他の意見	5	6	6	8	1	10	3	23
	対母親	多数意見	20	7	20	6	24	7	11	16
		その他の意見	3	5	5	8	0	5	1	9
4	対友人	多数意見	17	0	12	4	16	0	5	3
		その他の意見	6	12	5	18	5	15	5	24
	対母親	多数意見	21	8	15	10	20	7	8	12
		その他の意見	2	4	2	12	1	8	2	13
5	対友人	多数意見	30	0	28	0	29	1	18	1
		その他の意見	4	1	6	5	1	5	5	12
	対母親	多数意見	32	1	31	1	30	2	21	7
		その他の意見	2	0	2	4	0	4	3	5
8	対友人	多数意見	26	0	26	2	33	0	20	1
		その他の意見	7	1	5	5	3	0	5	8
	対母親	多数意見	34	0	27	3	35	0	23	3
		その他の意見	0	1	4	4	1	0	1	6

であった。この場合、「自分はてれくさいから立たない」「疲れているからそのまま座っている」というような理由で席を立つことに消極的な判断をしていますが、友人や母親は、「礼儀だから」「老人はつらいだろうと思って席を立つだろう」といった記述に示されているように、多数意見の方向の判断を下すだろうとみる傾向も認められた。これとは逆に、自己は多数意見と一致しているのに他者はその他の意見であるとみなす傾向は、相対的にいえば、友人の場合には認められるが、母親の場合には余りみられなかった。

自他の判断が不一致の場合は、対友人と対母親とでは相違がみられるので、次にこの点を検討する。

(2) 自己の判断と友人の判断との関係と、自己の判断と母親の判断との関係の比較

表5—1からも明らかなように、自己対友人の一致率と、自己対母親の一致率との間には、場面や学年をこえた一貫した傾向は見出されなかった。

しかし場面4では、3つの学年において共通して、対友人との一致率の方が対母親との一致率よりも高い傾向が認められた。この場面は、弱い者いじめをするBが先生に見つかって注意されているのをみて、皆が笑っているからいっしょになって笑うAの行動を判断するものである。表5—2に示したように、自己と他者の判断を一致させてみている場合の方がこの場面においても多い。しかし自己の判断が多数意見と一致していない場合の他者の見方を比較してみると、友人に対してはほとんど自己と一致させ

表 5—3 自己の判断が多数意見と一致しない場合の対友人と対母親の判断の比較
(χ^2 値 ; 1df) (* .05, ** .01, *** .001)

学年 場面	小学5年	小学6年	中学2年	中学3年
1	N. S.	N. S.	2.844	14.670***
4	9.188**	N. S.	6.708**	6.549***
5	N. S.	N. S.	N. S.	5.211*
その他	N. S.	N. S.	N. S.	N. S.

てみているのに、母親に対しては多数意見と一致させてみていることが明らかになった。このように、自己の判断が多数意見の方向にない場合には、自己の判断と、自己からみた母親の判断とは必ずしも一致せず、母親はむしろ多数意見の方向にあるとみなす傾向があった。判断の理由に関する記述をみると、場面4の場合、多数意見としていない自己の判断に関しては、「自分もいじめられたのだから笑ってよい」「おかえしをしてもよい」などとしている。ところが、同じ子どもが母親は多数意見に一致した方向で判断するであろうとみている場合は、「人のいやがることをするのはよくないから」「いじめられたからといっても叱られているのを笑うのはよくないことだから」などの理由が述べられていた。これに対して、自己の判断が多数意見と一致していない場合の友人の判断についての見方は、自己の意見に対する記述とほとんど同じ内容で記述されているか、「自分と同じに考えるだろうから」などと記述されている傾向があった。

場面4以外では、これほど明確ではないにせよ、やはり同様の傾向はみられた。すなわち、母親に対しては一種の規範的なみかたを示す記述が多く、規則は守るべきだからなどの記述がある。これに反して、友人に対しては、「大体自分と同じだと思うから」「自分と反対だとけんかになるから」といった記述さえみられた。

考察：

以上の結果を通覧してみると、自己の道德判断を、どの学年であれ、どの特定の場面の特定の道德的行動に対してであれ、一般に他者の道德判断と一致させてみている傾向が明らかとなった。この事実は、筆者らのこの表題に関する一連の研究(古畑・向井, 1975; 本報告(その2)など)において、子どもが準拠対象として親や友人を選択する傾向が顕著にみられることを示したが、このことと密接に関連があると考えられる。すなわち、自己と同一または類似した判断をしているとみなすことによって、そのような他者を準拠対象とみなすようになると考えることもできる。したがって、友人と自己の判断を一致させてみていく傾向と、準拠対象として友人を選

択していることとの関連性は、今後吟味していく必要がある。

さらに、自己の判断と多数意見とが一致していない場合に、友人よりも母親を多数意見の方向に一致させている傾向のあることを指摘したが、これは子どもが母親という準拠対象には、ある種の規範を代弁する役割を付与していることを示すものとも考えることもできよう。それではなぜ母親には規範の代弁者という役割を与え、これに対して友人には自己の意見を支持する役割を与えるのかについての資料は不十分である。この点の吟味もまた今後の課題というべきである。

要約：

以上筆者らは表題に関する一連の研究の中から、5点を取り上げて、その結果の概要を略述してきた。

まず、(その1)においては、筆者らの試作した道徳性テストの作成過程ならびにそれによる子どもの道徳判断反応の傾向を略述した。対人的葛藤状況を含む場面での道徳的行動に関する子どもの反応を、A：自己欲求充足型、B：他者志向型、C：規範遵守型、D：合理的現実的他人愛型、の4類型を設け、各場面ごとに4肢選択のかたちで求めるテストを作成した。そのテストによると、小学上級までには、Cおよび／またはDの反応が優位を占めるようになっている。

つぎに、(その2)では、上記道徳性テストによる道徳判断反応と、準拠人選択反応の全般的特徴を吟味した。準拠人としては、4年生は父母が選択される傾向が顕著であるのに対し、6年生になると友人の選択比率が高まる。道徳判断反応に関しては、学年・性のいかんにかかわらず、A・Bの反応が少く、C・Dの反応が多い。その傾向は女子においていっそう顕著にみられた。準拠人選択反応の類型と道徳判断反応の類型との間には、一定の有意な関連は認められなかった。

(その3)では、子どもの自身の道徳判断反応と準拠人の道徳判断反応との一致・不一致を仮設的に、実験的に提示し、それ以後の子どもの判断に及ぼす効果を検討した。子どもがAの反応をしている場合には、自己と

準拠人の反応が不一致であれば、子どもは事後に判断を変化させやすいが、それ以外は、一致・不一致が子どもの判断の変化に一定の効果をもつことは認められなかった。ただし準拠人の判断として提示したものに対する子どもの言語反応を吟味すると、“一致”の条件では準拠人の判断を肯定的に、“不一致”の条件ではそれを否定的に受けとめる傾向が認められた。

さらに、(その4)では、親と子とに、それぞれ別個に独立して、同一のテスト状況での自己の道德判断ならびに相手の道德判断についての推測を求め、それを基にして、親子の道德判断の一致度を、4つの基準によって比較検討した。子どもは自己の道德判断と親のそれとを一致させがちである。親もまた、親自身の判断と子どもの判断を一致しているものとみなす傾向が、子どもほどではないにせよ、やはりみられる。

最後に、(その5)で子どもの道德判断と、子どものみた母親および友人の道德判断についての比較を行った。自己と他者の判断とは一致しているものとみなす傾向がある。しかし、自他の判断が不一致の場合には、自己が多数意見ではないときには、母親には多数意見の方向での判断をするものとみなす傾向があり、子どもは母親には規範的役割を与えるものと解される。これに対し、友人には自己の意見を支持する役割を与えがちである。

以上述べてきた研究は、ごく基礎的な予備的な研究でしかない。必ずしも明快な結果も見出されていない。幾多の不備もある。しかしながら、道德性の研究において、準拠人、準拠集団の果たす役割は指摘されている(例えば、Wright, 1971)にもかかわらず、この点に関しては従来みるべき研究はきわめて乏しい(古畑, 1976; Hyman & Singer, 1968)。その意味では、基礎資料の提示ということと、今後の課題の指摘という点で、本報告にも一応の意義は認められてよいかもしれない。紙幅の制約上割愛したいくつかの資料は今後機会を得て改めて紹介する所存である。

引用文献

- 明田芳久・古畑和孝・向井敦子 1974. 準拠集団と道德性の発達(第4報告)(その3) 自己と準拠人の道德判断の一致, 不一致の効果. 「日本教育心理学会第16回総会発表論文集」286—287頁.
- 古畑和孝 1976. 準拠集団・準拠人と人格形成・大河内・海後・波多野(監) 教育学全集・第11巻「人格の形成」(増補版)・補説, 小学館, 11—16頁.
- 古畑和孝・林 仁忠・近藤邦夫 1967. 道德性の発達: (1) 道德性テスト作成の試み. 「日本教育心理学会第9回総会発表論文集」212—213頁.
- 古畑和孝・深見敦子・発智弘雄, 1972. 準拠集団と道德性の発達(第3報告) 道德性テスト作成の試み(II). 「日本教育心理学会第14回総会発表論文集」88—89頁.
- 古畑和孝・向井敦子 1975. 準拠集団と道德性の発達(第1報告) 子どもの準拠人 国際基督教大学学報 I—A 「教育研究」, 18, 55—93頁.
- 古畑和孝・向井敦子・明田芳久・発智弘雄 1974. 準拠集団と道德性の発達(第4報告)(その1) 準拠人選択反応と道德判断反応の全般的特徴. 「日本教育心理学会第16回総会発表論文集」282—283頁.
- 古畑和孝・向井敦子・発智弘雄 1975. 準拠集団と道德性の発達(第5報告)(その1) 親一子の道德判断反応の比較. 「日本教育心理学会第17回総会発表論文集」246—247頁.
- Hoffman, M. L. 1970. Moral development. In P.H. Mussen (Ed.) *Carmichael's manual of child psychology*. Vol. 2. New York: Wiley, Pp. 261—359.
- Hyman, H.H. & Singer, E. (Eds.) 1968. *Readings in reference group theory and research*.
- Kohlberg, L. 1963. The development of children's orientations towards a moral order: I. sequence in the development of moral thought. *Vita Humana*, 6, 11—33.
- Kohlberg, L. 1964. Development of moral character and ideology. In M.L. Hoffman & L. W. Hoffman (Eds.) *Review of child development research*. Vol. 1, New York: Russell Sage Foundation, Pp. 383—431.
- Kohlberg, L. 1969. Stage and sequence: the cognitive-developmental approach to socialization. In D.A. Goslin (Ed.) *Handbook of socialization theory and research*. Chicago: Rand McNally, Pp. 347—480.
- 向井敦子・古畑和孝・発智弘雄 1975. 準拠集団と道德性の発達(第5報告)(その2) 子どもの道德判断反応と, 自己のみた友人および母親の道德判断反応との関係の分析, 「日本教育心理学会第17回総会発表論文集」248—249頁.

- Peck, R.F. & Havighurst, R.J. 1960. *The psychology of character development*.
New York : Wiley.
- Piaget, J. 1932. *Le jugement moral chez l'enfant*. Libraire Félix alcan.
- 沢田慶輔・神保信一 1966. 「道德教育の研究」国土社.
- Wright, D. 1971. *The psychology of moral behaviour*. Middlesex, England :
Penguin Books.

REFERENCE GROUPS AND MORAL DEVELOPMENT (II)

Kazutaka Furuhata, Atsuko Mukai and Yoshihisa Aketa

This is a very brief summary of the report of a series of studies on reference groups and moral development.

In the first study, an attempt was made to construct a moral development test in terms of moral judgment in interpersonal conflicting situations. The test consisted of 16 questions, each of which included a conflicting situation of moral judgment, and four-choice response items; that is, Type A — selfish-expedient, Type B — conforming-other-oriented, Type C — conscientious-normative, and Type D — rational-altruistic. Out of four responses, described in terms of a form of concrete behavior, in each test situation, the subjects were asked to choose the most fitting response. The results show a remarkable tendency by fourth graders and above to dominantly choose C and D type responses.

In the second study, the general features of moral judgment responses and a mode of choice of reference persons were examined. Fourth graders were likely to choose parents as their reference persons whereas sixth graders were more likely to choose close friends. No significant relationship was found between children's moral judgment responses and their choice of reference persons.

Next, the effects of agreement and disagreement between moral judgment responses of reference persons and children's own responses were experimentally investigated to determine whether or not the children's responses were modified. Where the children's typical responses were of Type A, disagreement between their responses and those by reference persons was likely to lead to the children modifying their responses in the direction of agreement with the

reference persons' responses. In other type responses, however, such a tendency was not evident. In the condition of agreement, children tended to positively appreciate the reference persons' responses, but in the condition of disagreement, they were likely to react more negatively to reference persons' responses.

In the subsequent study, parent-child moral judgments were compared on the basis of four different criteria. In general, children tended to perceive parents' judgments as similar to their own; likewise, parents also tended to regard their children's judgments as similar to theirs. The latter tendency, however, was not as conspicuous as the former.

In the final study, children's moral judgments were compared with their mothers' judgments as perceived by their children, as well as with friends' judgments as perceived by the subjects. The subjects were very likely to interpret other's moral judgments as similar to their own. In cases of disagreement, children were likely to judge that their mother's responses were in accord with the majority judgments, whereas they tended to regard their friends' responses as supporting their own responses.

Finally, some promising lines for further study are discussed.